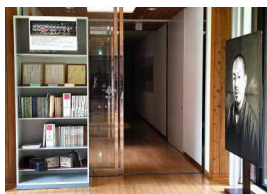


文学館だより



令和 8 年 7 月 1 日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文責 日高 第123号

お待たせしました<(_ _)> 坪谷小コーナー設置



牧水の母校坪谷小学校が閉校して3ヶ月が経ちました。牧水先生をはじめ1,850名の卒業生を送り出した坪谷小学校に残された「ポスト文集」（短歌集）、「おすず」（作文集）、「卒業文集」他を文学館が預かりました。

坪谷小149年の歴史を文学館が大切に引き継いでいきます。

卒業生のみなさん、地域の方のみなさん、どうぞ手に取って当時を懐かしんでください。文学館はいつでも開放しています。隣近所誘い合ってどうぞお越しください。

- | | |
|-------|---|
| ●展示品 | ①ポスト文集 昭和62年度～
②おすず 昭和42年度～
③卒業文集 昭和57年度～
④教育勅語戊申詔書 宮崎県東臼杵郡坪谷尋常小学校 ※外箱のみ
⑤若山牧水賞受賞歌人高野公彦、俵万智、坂井修一色紙 ほか |
| ●展示場所 | 若山牧水記念文学館ギャラリー ※閲覧のみは入館料無料です |
| ●開館時間 | 9:00～17:00 ※祝祭日を除く月曜日は休館です |

締切迫る 第16回青の國若山牧水短歌大会作品募集

日向市、日向市教育委員会、当顕彰会主催の『第16回青の國若山牧水短歌大会』の応募締切が今月末に迫ってまいりました。初心者大歓迎です。多くの作品をお待ちしております。

募集部門

【一般の部 自由題、題詠『歌』】
全国どなたでも応募できます

【小・中・高校生の部】
県内の児童生徒が応募できます

応募締切

令和8年7月31日（金）

詳細は、若山牧水ホームページ、およびInstagramをご覧ください。



小田加奈子コンサート 今年も開催します



昨年、〈牧水生誕140年記念／文学館開館20年記念〉企画で開催した小田加奈子コンサートを今年も開催することが決定しました。古関裕而作曲の「白鳥（しらとり）の歌」、「坪谷慕情」を今年も歌っていただきます。なお、今年は声優、FMひゅうがパーソナリティでおなじみ池田知聡（ともあき）さんに友情出演いただき、牧水の随筆を朗読していただきます。郷土の歌人若山牧水を郷土の歌手が歌うコンサート、牧水生誕の地へお誘い合わせの上どうぞお越しください。

日時	令和8年8月23日（日）	開場 12:30	開演 13:00
会場	若山牧水記念文学館		
料金	前売り券 1,500円（当日券 2,000円） 小中学生 600円（当日券 800円）		
主催	若山牧水記念文学館・日向若山牧水顕彰会		

第2巻月報（1992・11）

5 白鳥の一首

俵 万智

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

高校生のとき、この一首に出会って、すっかり牧水ファンになってしまった。すぐに覚えて愛唱していた。大学生になって、佐佐木幸綱先生の講義を聞いたことがきっかけで、私は短歌を作りはじめた。その講義で牧水がとり上げられたことがある。

話が、この有名な一首におよんだ。そして先生から投げかけられた質問に、どきっ。

「白鳥は一羽かな、それとも複数かな。そして空を飛んでいるのかな、あるいは波の上に浮かんでいるのかな。みんなは、どう思いますか？」

この歌に対して、自分が意外なほどあいまいなイメージしか持っていないことを感じさせられた。なんとなく二～三羽を思い描いていたときもあるし、一羽っきりの図を想像していたときもある。そしてその図のなかでは、白鳥は飛んでいたり休んでいたたり……。つまり定まったイメージというものを、決めずに愛唱していたというわけである。恥ずかしい話だ。

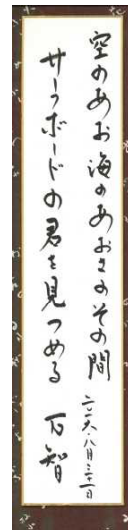
考えてみると、どっちなのだろう。もちろん、歌の言葉からは、どちらともとれる。

先生の解釈は「一羽が海に浮かんでいる」だった。群れていたのでは孤独感が薄れるし、飛んでいたのでは、視線の動きが大きすぎる、というのがその理由。なるほど、と思った。以来私の思い描く場面では、一羽が波間を漂っている。

たぶん、そのせいだろう。あるときボーイフレンドと海に出かけた私は、ふいに海岸で牧水のこの歌を思いだした。サーフボードに乗った彼が、一羽の鳥のように、波間を漂っていたのである。その場面を、本歌取りで表現してみたいと思った。もちろん、本歌は牧水の「白鳥は……」である。

空の青海のあおさのその 間 サーフボードの君を見つめる

本歌のイメージを借りて、彼が鳥のように見えた感じが伝えられれば、と思った。また、「哀しからずや」という問いかけを、白鳥ならぬこのときの彼に、私もしてみたかったのかもしれない。（歌人）

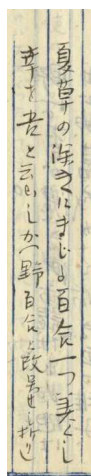


ちょうど 10 年前になるようです。右は、伊藤先生と俵万智さんがラジオ収録で文学館を訪れた際に俵さんに書いていただいた短冊です。（『青の国ラジオ紀行～俵万智＊伊藤一彦 牧水忌によせて～』MRT ラジオ 2016. 8. 31）本歌取りだなあ程度の読みでしたが、こんな物語が背景にあったのですね。

今回は第2巻月報（1992・11） 6 牧水の思い出（上） 鈴木 秋灯 を予定します。なお、表題前の数字は文学館だより掲載上連番とさせていただきます。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています



夏草の深きにまじる百合一つ美しく幸を吾と言ひしか
(野百合と改号せし折り)

なつくさの ふかきにまじる ゆりひとつ うつくしさを われといいしか

この歌は、牧水が延岡中学校（現宮崎県立延岡高等学校）5年生の時に詠み、明治36年発行の回覧雑誌「曙」12号に掲載されたものである。歌集には収められていない。左は当文学館収蔵の前述「曙」12号に載る「夏草の深きにまじる…」である。万年筆であろうか、18歳当時の牧水直筆が残る大変貴重なものである。

牧水と書いたが…。この歌の終わりに（野百合と改号せし折り）と付されている。牧水は、「牧水」と名乗るまでに雅号を複数回変えていることを紹介しておきたい。

「紅雲」 「秋空」 「桂露」 「雨山」 延岡中学校3年生当時

「白雨」 延岡中学校4年生当時

「野百合」 「牧水」 延岡中学校5年生当時

「牧水」という雅号は、延岡中学校5年秋頃から生涯変わることはなかった。

参照『若山牧水全歌集 伊藤一彦編』

予告

当文学館において、牧水メモリアルイヤーズ記念企画展「牧水 43 年の生涯～没後 100 年の軌跡を辿る」第4期『早稲田の牧水』がいよいよ8月5日（水）から始まります。北原白秋との出会い、第1歌集『海の声』発行の経緯ほかを、平賀春郊宛に送った牧水の書簡（直筆複写）を用いながら紹介、展示していきます。楽しみにお待ちください。【開催期間 令和8年8月5日（水）～12月27日（日）】